

婚資を持たなかった女たち

—クロード・デュロン『大世紀を支えた女たち』⁽¹⁾から—

野池恵子

バブルがはじけてからテレビ界では「貧乏生活」の紹介が目につくようになった。何年も前になるが、若者ふたりが限られた予算内で、陸路にてホンコンからパリをめざすという番組があった。『深夜特急』（沢木耕太郎 新潮社、1986）を思いおこさせる貧乏生活を送りながら、それでもアジア庶民のうまい物を食べつつ、またアルバイトをして小銭を稼ぎながら、大陸を横断して目的地に到達した。これが新鮮であり、ある程度の成功をおさめると、その二番煎じがつぎつぎにあらわれ、サバイバルがさかんに見られるようになった。極限状態を設定して、そのもとおこることを熱っぽく語るのである。さらに、ゲームではなく現実に耐乏生活を送る人間までテレビに登場するようになった。また、二人の貧乏の度合いを比べて勝ち負けを競う番組まででた。貧窮する人間の食べること、身を清潔にすることなどの努力がドキュメントされて、ただならぬ儉約のノウハウが事細かに紹介されるのである。食べること、あるいは身綺麗にすることが唯一の目標とされ、それを達成するためのきわめて論理的な方法が展開されるのだ。

もともと若者は貧乏のはずだ。人生の出発点にたつて、いかにして糧を得るか、真剣に考えるだろう。家庭が裕福だとしてもそれは子どものお金ではない。むしろ無一文であることを認識することのほうが、自身のやりたいこと、やれることを知るのに数倍役にたつ。橋本治も『貧乏は正しい!』（小学館、1994）で主張するように、所持金ゼロの地点にたつて、自身の存在の重みを感じ、社会を見ることが若者の自立に大きな力を与えてくれるのである。

突然であるが、フランスの17世紀に生きたほとんどの人の生活は、貧しかった。とくに生産手段を持ちえなかった女性たちはさらに貧しかった。アダム肋骨から作られた（といまだに信じられていた）女性は、親方などの要職を全うできる能力などないと考えられていたので、仕事にありつけるだけで幸いであり、末端の仕事で満足しなくてはならなかった。全体的に誰もが日々の生活をするのに精一杯であり、飢え死にしないだけましであった。女性なら売春という抜け道があると考えられようが、しかしそれなりの容色を長期間保つのは困難で、一生の仕事にはならなかったし、避妊が確実にできたわけではないので、失敗したときの悲惨はただごとではなかった。また避妊に失敗して出産してしまったあと、胎児を捨てなくてはならなくなることも多かった。未婚の母は、男の家の玄関先に捨てることができたが、夜路上に捨てると、猪が徘徊して朝になるまでに平らげてしまったという報告もある。もう10年ほど前に白水社から出版させていただいた翻訳書『大世紀を支えた女たち』には、そういった悲惨が細々と記されていた。まことの貧困の記録で、具体的でありきわめてリアルであつて、もちろん理由はそればかりではなかったが、フランス本国では、発

売当時ベストセラーになった。

本年2004年度にあらゆる重職から解放されて再び、新生活をお始めになった伊藤洋先生のご指導をおおいで共訳させていただいたこの書物の内容は、その題名とは異なり、当時の女性の日常生活である。大世紀を、結果的に支えてしまった女性たちの記録なのである。原題は「大世紀下の女性の日常生活」だ。著者クロード・デュロンが、古文書解読のテクニックを駆使して、さまざまな文献にあたりつつ私たちの目前に、17世紀の女性の日常の世界を出現させてみせてくれたのである。

1. 女のすべては子宮、2. 結婚 3. 子どもが生まれると 4. 社交生活の効用 5. 有名な女性はどのように生きたか（女優マルキーズ・デュ・パルク嬢、王妃アンヌ・ドートリッシュ、文人・高級娼婦ニノン・ド・ランクロ） 6. 女性と悪魔 7. 慈悲行の女性たち、の章がもうけられ、宮廷栄華が、またその陰りを生きた女たちの等身大の生活がそこに描かれるのだ。

貧困と悲惨に泡と消えた女性たちは、とりあげる術もないが、それにもめげずにある程度自分なりの生活をしえた女性たちのうちの何人かを、伊藤先生のご退職を記念するこのエイコスの紙上で、もう一度紹介してみたい。何もしないで収入を得られた裕福な貴族は除外し、一般の女性の生活の一端を眺めてみたい。時代も国も違う彼女たちは、意外に私たちと近いところにいるのである。

そのような女性を考察しようとする時第一に問題となるのは、その女性が人生を始めるにあたってどのような結婚をしたか、あるいは生涯未婚のままだったか、であろう。17世紀における結婚は、当人の恋愛感情など無関係に家同志が決める、ひとつの事業であったからだ。フルティエールの小説『町人物語』に紹介されている婚資一覧表が雄弁に語るように、娘は用意される婚資の多寡によって、結婚相手のランクが決められてしまうのだった。もちろん年齢のつりあいなどというものは度外視される。そのようななかで幸せな結婚をした女性もいた。夫婦愛は当時は認識されず、特別の愛情を配偶者に持っても、それを口にするのははばかれたので私たちの目につきにくい。デュロンの提示する手紙などの資料によって、そんな愛情で結ばれた夫婦も確かに存在したことが、現実として把握できる。しかしそれは少数で、一般的には結婚と愛情は別物であった。

婚資が支配した社会のなかで、金銭をしのぐ魅力と知性で結婚という事業に成功した女性を、まず、紹介しよう。ベルナルド・ジローである。相手は60歳というかなり年上の男性だったが、当時大人気の哲学の先生であった。

その頃、学問の言語であるラテン語を学ばせてもらえなかった女性たちは、日常語のフランス語で勝負した。日常語にみがきをかけ、洗練させる一方、知識の獲得もフランス語でおこなった。そんな女性たちのために、17世紀のフランスにも「カルチャーセンター」が存在した。ある所では、講義や行事は午後3時から6時までとし、夜の外出をしないですむようになっていたり、おやつが配られたり、講義ばかりではなくコンサートが催される日も設定されていた。現代フランス

のカフェ・フィロのように聴衆参加の討論会も進行役に導かれて催された。またここには図書室が併設されていて、本の貸し出しも行なわれた。そのようなセンターで特に人気があった哲学・道徳の先生がレスクラシュという人物であった。彼はチャート式の哲学概説書をおおいに売り、講議の会場に多数の聴衆を集めた。二年間でアリストテレスを全部習得しちゃおう、と誘われればと、向学心に燃えた女性たちは熱き思いを抱いて押し寄せてきたのであろう。すくなくともそこでは彼は、パスカルに勝っていた。この先生は当時の秘密結社である「聖秘跡会」のメンバーになり、有名サロンに出入りするようになったが、金もうけの方は大変得意だったようである。時流にのったレスクラシュの前にあらわれたのが、若いベルナルド・ジロー。才色兼備のこの女性は先生のチャートをすぐにうまく使いこなすようになり、討論会で熱弁をふるうようになった。先生のお気に入りとなり、ついに、60歳をすぎたレスクラシュに結婚を決意させたのだ。

ところがベルナルドは哲学をその後、放棄してしまう。夫のレスクラシュはそのため破産をしたという。しかし彼はつぎに失地挽回をめざして、フランス語の綴り法の改革について書物を著すことになる。綴りを単純化すれば、フランス語はそれだけ多くの理解者を獲得することになる。当時の女性にとってはまことに有り難い書物となるはずだった。というのも、この類いの提案は、周期的に浮上し、毎回、多くの反対意見にあって挫折してきたからだ。しかし結局、レスクラシュの場合もその例にもれず、世間に受け入れてもらえないまま、放置されてしまった。

ベルナルドは、夫の死後、その著書の出版允許をとっているのだから、デュロンによると先見の明があったことになる。

デュロンではレスクラシュの側の資料が圧倒的に多く、ベルナルドの姿はとらえにくい。しかし少なくとも、彼女は当時の結婚制度から身をずらすことができた。そして自身の力で先生のお気に入りになり、助手になり、結婚して、女性の利益になる綴りの単純化についての書物を夫に書かせ、また夫の死後はそれまでの著書の印税を自身がきちんと確保したのである。17世紀の女性としてはかなり異色の存在で、革新的な生き方をしたと言えるのではないだろうか。

有名になった最初の女優として、デュロンはデュパルク嬢をあげている。彼女も結婚をして自身をいかしたタイプである。リヨン近郊の見せ物小屋で売春まがいの大道芸をしていた時に、そこに巡業で通りかかったモリエール一座に拾われて、女優の道を歩みはじめる。無一文であったが、一座の男優デュパルクから金銭の援助を得て、破格の結婚をしたのである（3000リーヴルとドレスと婚礼衣装という彼女の婚資は、デュパルクが彼女の家を提供していた）。彼女自身は夫から上等な衣服や指輪などをプレゼントしてもらい、夫に先立たれた時のために2000リーヴルの寡婦資産まで設定してもらった。彼女の美貌と踊り、踊る足が、また女優としての資質が、婚資の代わりをしたと考えられる。その後彼女は、女優として一座で仕事する間にモリエールをそでにした。巡業を終えてパリに帰る最後の行程で一座が立ち寄ったルーアンにおいては、彼女に恋をしたコルネイユを冷たく拒否した。また夫デュパルクの死後は、ラシーヌの恋人になって一子を設けた（デュロンはラシーヌの書き付けを裏付けとして提出している）。『アンドロマク』では主役を、ラシーヌの個人的

な指導を受けて堂々と演じたことはすでに良く知られている。デュパルク嬢は、女優としては17世紀の偉大な劇作家3人と密接な関係を持つことで、その才能を十全にいかすことができた特異な存在であった。

ルイ14世の愛妾となり、のちに結婚をしたマントノン夫人もここにあげておかなければならぬだろう。孤児で財産のなかった17歳の彼女は、修道院行きを逃れるため不具であったスカロンを夫にした。そして夫が催す大宴会で、高い評判を少しずつとるようになったのである。美しさと若さと社交のセンスが婚資のかわりになったのであろうか。彼女も結婚によって貧困から逃れて、デュロンがこの訳書で紹介しているように、社会で自身の才能を活かすことができた人物であった。

社会の悲惨に打ち勝ち自身の生活を送ることができた未婚女性の筆頭は、ニノン・ド・ランクロであろう。父親は下位の貴族であったが、彼女が適齢期になる頃には国外に亡命してしまっていた。デュロンは彼女のように「結婚のための財産も適性もない女性は17世紀においてはどうやって生活したらよかつただろうか」と問いかけている。すなわち、ニノンは23歳で、言い寄ってきた老人を受け入れる決意をする。娼婦として人生をはじめたわけであるが、記録作家タルマンによると彼女が金づるを容認したのは金が必要となくなるまでであった。彼女の暮らし向きには、本来の娼婦の贅沢さは見られなかったという。

デュロンは、ニノンを17世紀の時代背景のなかでは、自由な女だったとしたうえで、重要なことは、彼女が他の女性の解放に力を貸したことであったと考えている。この時代のプレシューズたちは、ニノンと同じように「男性優位の考えは神話にすぎない。自由、恋愛、知識への権利が男性に与えられ、女性に拒否されるのは途方もない不正行為だ。結婚、この奴隷制度は拒むか解消しなければならない」と考えたが、自由な恋愛は拒否した。プレシューズたちは絶対的な愛を求め、知的な楽しみに埋没したが、ニノンはそれを物笑いの種にした。女性が男性と同じ権利を持つなら、また良識とは、幸せになることをめざすものなら、プレシューズたちが高く評価する羞恥心や貞節などまったく必要ない代物だ、と彼女は主張した。

ニノンは、男性と肉体関係を持つだけではなかった。サロンを開き、彼女の美貌では魅了できなかった男性を、才知にあふれた会話で虜にし、影響を与えたという。モリエールは『タルチュフ』の批評をニノンに求めた。作家シュヴァリエ・ド・メレや、サン＝テールモンもニノンとは特別な交流をもった。とくに後者はニノンのよき理解者で、サン＝テールモン本人の言によれば、彼はニノンにとって友人にして真実の恋人であるような人物となっていた。ニノンはサン＝テールモンの影響を受けて、エピクロスを知り、また、無神論についても考えを深めていった。彼女は人生を送るのに宗教を必要としなかった。四旬節の精進期間のあるとき、彼女の部屋から投げ捨てられた骨が、下を通っていた司祭の頭にぶつかったことから、当局から目をつけられ、別の機会に投獄されたこともあった。さらに興味深いのは、スウェーデンのクリスティーヌ女王が牢獄を訪れて、

彼女を救い出しイタリアに連れて行こう、と申し出たのにもかかわらず、それを断ってしまったことである。デュロンによれば、ニノンが誰かのお気に入りになるなどということは、考えられないことなのであった。

彼女のサロンは、しだいに若者たちの教育の場となっていった。彼らに「欠如していると思われた精神や、優雅な作法」を教えたという。17世紀も終わりに近づいたころには未来の摂政のフィリップ・ドルレアンの姿もそこにあった、とデュロンは述べている。

ニノンは死後、釜ゆでにされるとは信じていなかったが、死が近くなったとき、モンテーニュやセネカで親しんだ福音書を試しに読んでみてもよいという気持ちになった。彼女は自分に教育してくれるように司祭に頼んだが、誰もがそれに失敗した。しかし、最期の時がきたと悟ったとき、彼女の小教区の主任司祭を呼び、キリスト教徒としての死を選んだ。彼女のサロンに出入りしていたシュヴァリエ・ド・メレがよく知っていたパスカルという人物の「信仰についての賭けの論理」を思い出したかも知れない、とデュロンは考えている。ヴォルテールが彼女のサロンの常連だったという誤った記述がそれまでされてきたが、この司祭ブリュネの、当時12歳だった息子がヴォルテールであり、ニノンは利発なこの少年に本代として金銭を残しただけで、決して恋人にしていたわけではなかったことが、デュロンによって明らかにされている。

ニノン・ド・ランクロは、娼婦をしながらお金をためて、それを有効に使う能力を備えていた。また恋愛もしたが、恋人にしなかった男性たちとは熱い友情で結ばれた。さらに同時代人たちに、老いては若者たちに警句を投げかけて、彼ら、彼女らの自己解放に力添えをした。ニノンは無一文からスタートをして、生活をしっかりとうちたてたばかりではなく、社会にたいしても影響力を発揮して、女性差別や宗教的不寛容を正そうとしたのである。

デュロンは17世紀を慈善の世紀ととらえる。宗教の分野では対極に魔女裁判や悪魔つきなどが存在し、いまだに数多く報告されている世紀である。女性が夫の許可や同意なしでできる唯一の出費は施しであり、信仰というバックに支えられて自然な形でただ身を投じることができた活動領域が、慈善であったということである。したがって多才な作家シラノ・ド・ベルジュラックの永遠の恋人であったマドレーヌ・ロピノー（エドモン・ロスタンの作品のなかではロクサーヌ）など、裕福な独身女性や寡婦の名前をこの分野に数多く見つけることができる。

そのような人物のなかから、財産もないのに頭と足だけで慈善病院を完成させた女性マルト・ド・ラ・ポースを最後に紹介しよう。「金持ちや事情通」の人びとがそれまで何度となく失敗してきた事業であったという。正確に言うと20ソルの貯金があっただけだったが、彼女は計算と読み書きはできたそうである。1639年にアンジュー地方のボージュで彼女は病院建設を決意し、二人の敬虔な名士を紹介してもらう。その名士を通じて、住民の集会を持ち、また司教と法官の賛同を得て、建設用の土地をようやく手にいれる。しかし寄付は自身で集めなければならなかった。4年間の努力の末、やっと礎石が置かれるところまでこぎつけた。しかしその先6年の間、礎石はそのまま放置された。マルトは寄付を募るのに、たとえばその土地に丸太をおいて通行人の慈悲に訴えるなど

さまざまな方法を実行したが、はかばかしい結果は得られなかった。借金をしようとしたが、担保がない。町を訪れた金持ちを待ち伏せして直接訴えようとしたが、従者に追い返されてしまう。病人を見舞い、遺産の一部を寄付するよう頼んでみても、遺産相続人たちが怒り狂い、彼女を追い払うだけだったのだ。貧者たちのほうがいくらか気前がよかった。彼女の演説を聞いた農民はわずかな額であったが寄付をした。ある者は一日の労働を提供した。ある者は荷車を使って荷運びをした。何も持たない老婦人はエプロンに石を入れて、現場まで運んだという。

マルトはそののち廃虚となった礼拝堂の資材を手に入れる。森の木を伐採する権利も入手する。さらに近隣の聖職者から300リーヴルを寄付してもらう。それを見たボージェの名士たちがようやくその倍額を彼女に貸与することにした。しかし建物は立ったものの、屋根をつけるところで金が底をついてしまった。彼女は、当局にかけあって、目当ての屋根職人の人頭税を免除してもらうよう交渉する。屋根職人にとってその税金は重かったので、また当局も新たな出費をするよりましだったから、要求は受け入れられた。

建物が完成した後、設備や職員を整備するのに、マルトはまた一苦労しなければならなかった。しかし今度はオランダの名門の女性で、慈善を行う場所を探していたアンヌ・ド・ムランに会うことができた。ボージェの近くのラ・フレーシュの慈善病院に病をえて偽名を使って入院していたアンヌにマルトは会い、慈善の場所として彼女の病院を選ぶように説得したのであった。

マルトはその開放的な性格、あふれる情熱とねばり強さをいかして、慈善病院の建設という目標に邁進した。障害があらわれる度に知恵を働かせて、大事業をなしとげたのである。

以上、人生のスタート地点で婚資がなく貧乏だった女性を、クロード・デュロン著『大世紀を支えた女たち』の中から選び、その日常生活を垣間見てみた。彼女たちの生き方や社会での活躍をみると、彼女たちが貧しかったことは、正しかったと考えられる。財産を持たなかったからこそ、当時熾烈だった結婚のための闘いから、身はずすことができた。以後、事あるごとに自身で考え、決断して、人生を切り開いていくことができたのである。

現代においては、フランスにも日本にも婚資は存在しない。しかし、結婚と金銭はあいかわらず密接にからみあっている。日本では昨今、晩婚化が進んでいるが、小倉千加子著『結婚の条件』（朝日新聞社、2003）によると、結婚願望があるにもかかわらず、独身でいる人たちの結婚しない理由は、おもに、適当な相手にめぐりあえないからというものである。それをさらに追求すると、あいかわらず女は男にカネをもとめ、男は女にカオを求めている、お互いに自分を安くは売らない傾向が根強いという。女性であれ男性であれ、経済的に独立して、金銭と結婚を分断してこそ、すべては始まるはずである⁽²⁾。

註

(1) クロード・デュロン『大世紀を支えた女たち』伊藤洋・野池恵子訳、白水社、1991

Claude Dulong : *La vie quotidienne des femmes au grand siècle*, Hachette 1984

婚資を持たなかった女たち——クロード・デュロン『大世紀を支えた女たち』から——

- (2) 17世紀フランスばかりではなく、小倉の指摘によると現代の日本においても、女性の労働賃金は安すぎて、今だに結婚しないと食べていけない女性の数は馬鹿にできないという。わが国における男女の賃金格差は経済発達国の中ではきわだって大きいのだ。